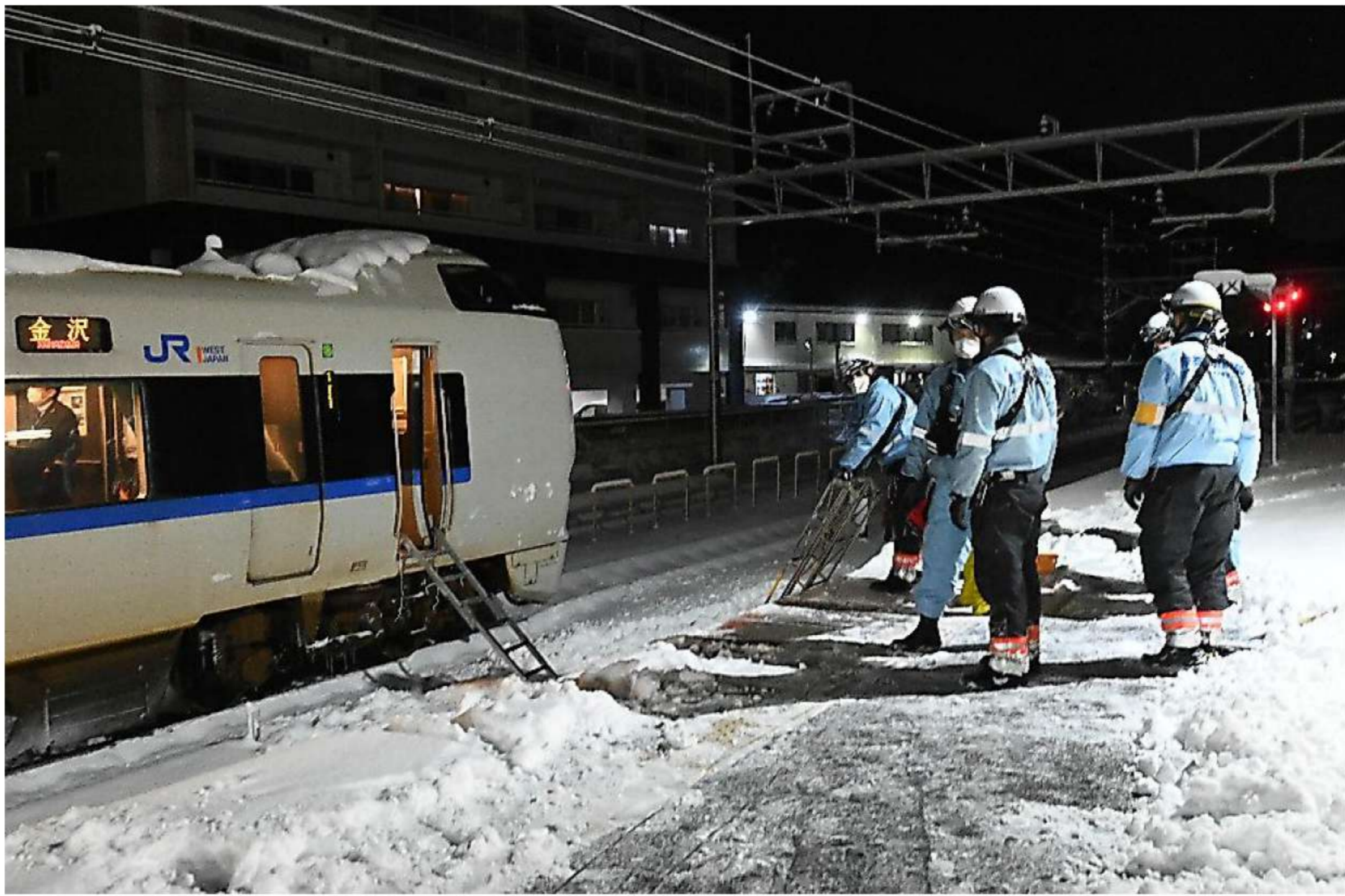


# 帰宅困難者支援 素早く



2023年1月、大雪によってJR山科駅で止まった特急列車に救急隊員が駆けつけ、体調不良の乗客を救助した。2023年1月25日午前1時ごろ、山科区

## 京都市と医療法人が協定

京都市と医療法人社団洛和会（山科区）は、災害時に帰宅困難者をいち早くサポートするために包括協定を結んだ。2年前の大雪で列車の立ち往生が相次いだことが、きっかけとなった。



協定を締結した京都市の松井孝治市長（左）と医療法人社団洛和会の矢野裕典理事長。中京区

## 大雪で列車立ち往生 きっかけ

協定では、地震や大雪などの自然災害で公共交通機関が止まった場合、市が依頼し、洛和会が帰宅困難者の支援に協力することを定める。消防を通さずに市が洛和会へ直接情報共有することで、素早い対応が可能になるという。

洛和会は、音羽病院（同区）など三つの病院に専門の訓練を受けた「災害支援ナース」が13人在籍している。この人材を生かし、災害現場へ急行して体調不良者の救護や救急搬送するかの判断を担うほか、災害の発生が予測される場合には、事前に現場に派遣して被害軽減を図る。

背景には2年前の苦い経験がある。2023年1月、大雪によってJR京都線・琵琶湖線で列車の立ち往生が相次ぎ、京都―山科間では列車4本の乗客約2500人が車

## 消防通さず情報 現場に看護師

内に最長10時間閉じ込められた。満員の列車もあり、頭痛や吐き気などを訴える人が続出した。音羽病院には9人の患者が救急搬送されたが、市と十分な情報共有がされないまま治療にあたった。患者からは「現場に対応できる看護師がいてくれれば」という声もあったという。

洛和会の矢野裕典理事長は「もっと早く何かできることがないか、もどかしい思いをした」と振り返る。この反省を生かし、洛和会が市に協定の締結を提案し、実現したという。

1月30日の協定締結式で、松井孝治市長は「京都には年間5千万人の来訪者がいて、帰宅困難者が発生するリスクが高い。協定締結は大きな進歩だ。来訪者が安心して滞在できる街をつくりたい」と述べた。（武井風花）